

河内大塚山古墳を活かした町づくり

西田 孝司 (松原市文化財保護審議会)



▲河内大塚山古墳の濠を泳ぐ水鳥と墳丘の樹木 (保田紀元氏撮影)



▲河内大塚山古墳の案内板 (松原ライオンズクラブ設置)



▲設置された手洗鉢案内板 参集殿前に建てられた。



▲柴籬神社安置の石室材転用の手洗鉢 (上田七丁目)

「おおさか古墳サミット」開催と柴籬神社の石室材手洗鉢案内板

十二月十二日、堺市で百舌鳥・古市古墳群が令和元年七月に世界遺産に登録されたことを記念して、「世界遺産登録一周年記念事業 おおさか古墳サミット」が開催されました。その目的は、「古墳を有する府内自治体と連携して、それぞれの古墳の保存・継承や古墳を活かしたまちづくり等の取組について情報共有を図り、情報発信をすることを通じて、世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」の価値と魅力について、効果的に情報発信するとともに、今後の保存管理に寄与すること」でした。

本市からは澤井宏文市長がトークセッションのパネリストとして登壇し、観光課担当者が市内の取組み事例として河内大塚山古墳を紹介しました。

河内大塚山古墳は、現在、宮内庁によって皇室の先祖を祀る尊厳な墓域として、陵墓参考地に指定され、一般人の立ち入りは許されていません。しかし、古墳の濠には四季を通じて多くの水鳥が羽を休めていますので、バードウォッチングが楽しめます。また、墳丘を覆う樹木の移り変わりが人々の心のいやしを与えてくれます。その上、古墳の濠の回りを二〇〜三〇分で全周できますので、多くの人々がウォーキングに精を出しています。西大塚町会のご協力で、濠に沿って石張りもされ、

安心して健康増進も図られるのです。プレゼンテーションでは、河内大塚山古墳の歴史とともに、こうした古墳の楽しみ方が紹介されました。河内大塚山古墳は文化財であるとともに、本市にとって古墳を活用しながら、観光の一大目玉になるのです。百舌鳥・古市古墳群を訪れる多くの人々が、両古墳群の中間地である河内大塚山古墳にも立ち寄り寄ってもらえるよう努力しなければなりません。

本市では、堺市・羽曳野市・藤井寺市と連携して、「もぎふるレンタサイクル」事業に参加し、近鉄河内松原駅と布忍駅に貸自転車を置いてあります。また、すでに河内大塚山古墳の前方部西側の堤に、私が執筆させていただきましたが、松原ライオンズクラブ設置の案内板も見学に供します。

こうした機運をうけて、河内大塚山古墳に設けられたと思われる石室材が近くの柴籬神社に手洗鉢として安置されていますので、先日、案内板を書かせていただきました。次に、その全文を掲げます。

当社安置の手洗鉢に転用されたと考えられます。大正時代末期まで前方部には数十戸の集落があり、後円部頂上には天満宮(菅原神社・大塚社)が祀られていました。江戸時代以降、菅原道真を祭神とし、所在地の西大塚村・東大塚村の氏神でした。明治時代後半、天満宮が古墳上から柴籬神社に合祀された際、移されたものです。

石種は黒雲母花崗岩で、柏原市平尾山から青谷にかけて分布する岩相に類似しています。上面は加工されていますが、側面は自然面です。

上面には「水」と刻まれています。上面手前の縁に、江戸時代につくられた口径9cmの矢穴跡が並んでいます。上面の大きさは左右が約一・五m、前後が約〇・六mです。高さは約〇・五mを測ります。

側面左側に「天満宮」、裏面に「享和元辛酉年」九月「東大塚村氏子」とあります。江戸時代後半の享和元年(一八〇二)九月、東大塚村の氏子が古墳の石室材を利用して、奉納したものです。

『河内名所図会』(享和元年十一月)に紹介された「柴籬宮旧跡」の挿絵の中に、天満宮(大塚社)参道石段左側に大きな手洗鉢が描かれています。江戸時代から、この石室材・手洗鉢は、人々によって注目されていたことがわかります。

古墳の関連文化財として、石室材の案内板が有効な観光ツールの一つとして、活用されればと思っています。